

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計	成果と課題及び改善策等	判定基準	備 考															
1 地域(生徒・保護者)の期待と信頼に応える学習指導と進路実現を達成するため、家庭学習習慣を確立し、「確かな学力」を図る。	① 生徒が主体的に授業に取り組めるように授業改善に取り組む。	教務課 各学年 各教科	授業改善に取り組んでいるが、生徒が主体的・協働的に活動する場面がまだ十分ではない。	【成果指標】 生徒による授業評価を実施し授業改善に努める。	授業がわかりやすいと答えた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	B 89.1%	《成果》 授業がわかりやすいの項目に、「とても当てはまる」、「やや当てはまる」と答えた生徒が89.1%であった。 【課題】 授業が解りにくいと答えた生徒が11%近くおり、これらの生徒を減少させる必要がある。 『改善策』 授業評価アンケートをもとに、教員が授業を振り返ったり、互見授業で他の教員の授業を参考にすることで、授業改善に取り組む。	C以下の場合 は取組を改善する。	生徒へのアンケート															
				【努力指標】 生徒が主体的・協働的に活動できる場面を取り入れている。	授業では生徒がアクティブラーニングやグループ活動など主体的・協働的に活動できる場面を、 ア. よく取り入れている。 イ. やや取り入れている。 ウ. あまり取り入っていない。 エ. 取り入っていない。 A アとイの合計が80%以上 B アとイの合計が70%以上 C アとイの合計が60%以上 D アとイの合計が60%未満		B 79.2%			《成果》 24名中19名が生徒が主体的・協働的に活動できる場面を取り入れていると答えた。 【課題】 新型コロナの影響で、グループ活動など思うような取り組みが出来ないと答えた教員もいる。 『改善策』 状況を見ながらグループ活動を取り入れたり、コロナ対策をきちんとした上で、生徒が主体的に活動できるように工夫するように取り組む。	C以下の場合 は取組を改善する。	教員へのアンケート												
				【努力指標】 授業改善に生かす目的を持って、互見授業に参加した。	授業改善に生かす目的を持って、互見授業に参加した。 A 6回以上参加した。 B 5回以上参加した。 C 4回以上参加した。 D 4回未満参加した。					A 6.01回 (平均)			《成果》 4月5月に1年目の教員の互見授業を多く設けたことで、3回1人、4回1人、5回以上が19名で90%の教員が互見授業に参加することが出来た。平均は6.01回である。 【課題】 規定の回数に達していない教員がいる。 『改善策』 互見授業週間を設けたり、小中学校への参観を依頼するなど、早期に目標を達成できるようにする。さらに、多忙化などの業務改善に取り組み、互見授業に参加しやすくする。	C以下の場合 は取組を改善する。	教員へのアンケート									
	② 家庭学習時間調査と個人面談を行うことで家庭学習習慣の定着を図り「確かな学力」を育成する。	教務課 各学年 各教科	家庭学習習慣が身につけていない生徒、家庭学習時間が不十分な生徒が多く、家庭学習習慣の定着が求められている。	【成果指標】 普通科では学年+30分の家庭学習が確保された。	〔普通科1年〕90分の家庭学習に対する取り組み状況が、 100%達成の生徒数を a 80%以上達成の生徒数をb 60%以上達成の生徒数をc 60%未満の生徒数を d とし、段階的に評価する。 (1.0×a+0.9×b+0.7×c+0.5×d)/40×100 (%) で計算した結果、学習時間を達成できている人数の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である	A 88.8%		《成果》 6月と7月の調査であったが、7月末には期末考査が実施され、今年は学期に一回の考査となった。試験範囲が広く、早期から考査対策に取り組み、家庭学習時間が増えた。 【課題】 クラスの平均の学習時間が6月は7月より30分少ない。考査のない月においても、家庭学習を促す仕組みが必要である。 『改善策』 模擬試験に向けて、10月は「英語強化の月」など、強化する教科や時期を決めて、目的を持った学習に取り組ませるようにする。	C以下の場合 は取組を改善する。				月毎にクラスの学習記録を集計											
				【成果指標】 普通科では学年時間の家庭学習が確保された。	〔普通科2年〕120分の家庭学習に対する取り組み状況が、 100%達成の生徒数を a 80%以上達成の生徒数をb 60%以上達成の生徒数をc 60%未満の生徒数を d とし、段階的に評価する。 (1.0×a+0.9×b+0.7×c+0.5×d)/40×100 (%) で計算した結果、学習時間を達成できている人数の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である		A 83.5%	《成果》 1年次よりも考査のない月であっても学習時間が伸びた。学習時間0時間の日が格段に少なくなった。さらに、考査のあった7月では120分を達成できた生徒が78%であった。 【課題】 1年次よりも学習時間の下がった生徒が数名見られ、その中には国公立志望の生徒もいることから面談等での指導が必要である。クラス全体としても安定して120分を超えられる生徒の数が少ない。 『改善策』 面談での個別指導計画を生徒とともに練る。とくに国公立志望の生徒は安定した学習時間を確保させる。進路によって差がでないように底上げ指導も図り、3年生までの見通しを持たせようとして目標を設定する。			C以下の場合 は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計												
				【成果指標】 普通科では学年時間の家庭学習が確保された。	〔普通科3年〕180分の家庭学習に対する取り組み状況が、 100%達成の生徒数を a 80%以上達成の生徒数をb 60%以上達成の生徒数をc 60%未満の生徒数を d とし、段階的に評価する。 (1.0×a+0.9×b+0.7×c+0.5×d)/40×100 (%) で計算した結果、学習時間を達成できている人数の割合が A 80%以上である B 70%以上である C 60%以上である D 60%未満である			A 87.2%		《成果》 学校休業中に家庭で学習する習慣を身につけることができた。自主的に苦手分野を見つけ、克服のために取り組もうとする生徒が増えた。放課後補習終了後も学校に残ったり、公営塾に通ったりして学習量を確保している。 【課題】 AO入試を受験した生徒たちの学習時間が減少傾向にある。またクラス全体として学習量に大きな差が見られる。 『改善策』 教科担当と連携して、課題を与えてもらったり、模試の見直しに取り組ませたりして苦手分野に取り組む中で、学習量を確保させる。				C以下の場合 は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計									
				【成果指標】 地域産業科では提出物を期限内に提出することができた。	〔地域産業科1年〕提出物や課題を提出期限内に提出することができた。 ア. すべて提出した。 イ. 大体提出した。 ウ. あまり提出しなかった。 エ. ほとんど提出しなかった。 A ア. イの合計が90%以上 B ア. イの合計が80%以上 C ア. イの合計が70%以上 D ア. イの合計が70%未満					B 85.4%						《成果》 入学後すぐに休校になった、その緊張があったため、大方の生徒の提出率はよかった。 【課題】 特定の生徒が提出していない。 『改善策』 クラス全体として提出の大切さを理解するとともに、お互いに声掛けを行う雰囲気をつくる。	C以下の場合 は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計						
				【成果指標】 地域創造科では提出物を期限内に提出することができた。	〔地域創造科2年〕提出物や課題を提出期限内に、 ア. 必ず提出した。 イ. ほとんど提出した。 ウ. あまり提出していない。 エ. 提出してない。 と答えた生徒の割合が、 A ア. イの合計が90%以上 B ア. イの合計が80%以上 C ア. イの合計が70%以上 D ア. イの合計が70%未満											B 80.0%			《成果》 進路意識を持たせることで提出物の提出率の向上につながった。 【課題】 出さない生徒が固定化している。 『改善策』 面談等を積み重ね、提出物がなぜ大切かを伝えていく。	C以下の場合 は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計			
				【成果指標】 地域創造科では提出物を期限内に提出することができた。	〔地域創造科3年〕提出物や課題を提出期限内に、 ア. 必ず提出した。 イ. ほとんど提出した。 ウ. あまり提出していない。 エ. 提出してない。 と答えた生徒の割合が、 A ア. イの合計が90%以上 B ア. イの合計が80%以上 C ア. イの合計が70%以上 D ア. イの合計が70%未満														B 81.1%			《成果》 1学期期末考査が進路実現に向けて重要であるという事前指導を行った結果、昨年度より課題の提出率が上昇した。 【課題】 課題の提出率が高い生徒と低い生徒の二極化が進んでいる。 『改善策』 提出率の低い生徒に対して各教科担当と連携し、提出状況を把握し、丁寧な声かけをしていく。	C以下の場合 は取組を改善する。	月毎にクラスの学習記録を集計

令和2年度学校経営計画に対する評価計画(重点目標に対する各課・学年の取組)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計	成果と課題及び改善策等	判定基準	備 考			
③	各課・各教科と学年団との連携と情報の共有化により生徒個々に応じた多面的な進路指導を行い、生徒が進路実現に向けて意欲的に学習などに取り組める環境づくりを進める。	進路指導課各学年	進路希望先を具体的に決定するのが遅れるため、進路実現に向けて準備期間が不十分になる傾向がある。	【成果指標】 年度末までに進路目標を定め、次の行動を意識することができた。	〔1年〕 年度末までに進路目標を定め、次の行動を意識できた生徒の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	61.2%	《成 果》 LHR、総合的な探究の時間を活かして、卒業後の進路について考えることができた。20%の生徒が進路希望として、具体的な学校名・企業名を挙げている。 【課 題】 自分の進路について、まだまだ、漠然と考え決めていない生徒がいる。 『改善策』 担任の面談を重ねることと進路指導課による進路ガイダンスや進路情報の提供を通して、進路について考えさせていく。	C以下の場合 は取組を改善する。	・進路希望調査 ・生徒へのアンケート			
			進路目標の設定が遅れ、自己実現のために授業や総合的な学習の時間を有効に活用できていない生徒がいる。	【成果指標】 年度末までに具体的に進路目標が定まり、実現に向け準備を始めた。	〔2年〕 年度末までに、進学は具体的な上級学校を、就職は具体的な職種を定め、実現に向けて準備を始めた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満		63.4%			《成 果》 具体的な進路を決定し、それに向けた発展的な学習をしている生徒が15%存在する。 【課 題】 1割ほどであるが、進路について決定していない生徒もいる。 『改善策』 進路ガイダンスや個人面談を通して、具体的な進路先を提示して、進路意識を高めさせる。	C以下の場合 は取組を改善する。	進路希望調査 生徒への アンケート
			進路先決定までに十分な準備ができた。	【成果指標】 進路先決定までに十分な準備ができた。	〔3年〕 中間評価では就職、最終評価では進学において、合格を得るまでに十分な準備ができた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満					55.9%		
	進路指導課と1年学年団・担任との連携により、進路面接の質を高め、面談回数を増やすことで進路目標の早期決定を促す。	進路指導課第1学年	進路目標の設定が遅れ、自己実現のために授業や総合的な学習の時間を有効に活用できていない生徒がいる。	【努力指標】 生徒一人一人との個人面談回数が、 A 6回以上 B 5回以上 C 4回以上 D 4回未満	2回	《成 果》 5月6月の休業後、実施回数は少ないが有効な面談が実施できた。多くの生徒が学校生活に積極的に取り組み、学習意欲も高い。 【課 題】 模擬試験や基礎力診断テストの結果を受けての面談ができていないので、早期に実施し生徒の進路希望の確認を行わなければならない。 『改善策』 面談前に面談資料を生徒に作成させるなど効率的に面談を行い、実施回数を増やす。	C以下の場合 は取組を改善する。	・個人面談数調査 ・生徒へのアンケート				
	今後を見据えた進路指導に取り組み、具体的な進路目標の決定を面談を利用して促すことにより「確かな学力の育成」を図る。	進路指導課第2学年	目標が定まらず進路実現へ向けての具体的な取り組みが足りない。進路決定に向けて授業を有効に活用していない生徒への指導が必要である。	【努力指標】 生徒一人一人との個人面談回数が、 A 7回以上 B 6回以上 C 5回以上 D 5回未満		2回			《成 果》 面談を通して休業後の確認をすることができた。また面談を通して具体的な進路指導等を行うことで、中だるみと言われる学年にならないように取り組むことができた。 【課 題】 休業期間で生活リズムや学習時間の乱れが見られる。 『改善策』 面談を重ねることで具体的な進路を決定していく。	C以下の場合 は取組を改善する。	・個人面談数調査 ・生徒へのアンケート	
	一人一人の進路目標に対するきめ細やかな指導を目指すべく個人面談をきめ細かに実施する。	進路指導課第3学年	学業や部活動の両立を目指し、実際に両立させている生徒が徐々に増えている。目標意識の高揚も併せて、実力養成のための補習、資格試験、模擬試験においても頑張りを見せている。個人レベルでの自主・協調の研鑽を一層積まねばならない。	【努力指標】 生徒一人一人との個人面談回数が、 A 7回以上 B 6回以上 C 5回以上 D 5回未満	5回		《成 果》 休校期間中は、家庭訪問やオンラインなど工夫して個人面談を行う事ができた。学校再開後は、面談週間や昼食時などの時間を利用して面談を行い、具体的な進路について話することが出来た。 【課 題】 具体的な進路先を決めかねている生徒が数名いる。 『改善策』 生徒や保護者とコミュニケーションを密に行い、進路を決めていく。	C以下の場合 は取組を改善する。	個人面談数調査及び生徒へのアンケート			
2 安全、安心な学校づくりの推進による「規範意識・公共心等の醸成」と、変化する社会に対応できる精神的な逞しさを備えた「人間力の育成」を図る。	生活時間	「遅刻ゼロ運動」の取組も4年目となり、理由のない遅刻は減ってきたが、遅刻ぎりぎりの登校が各学年各クラスに若干名みられる。今年度も全校生徒で遅刻ゼロの日が増えるよう運動を続ける。余裕をもった登校が安定した学校生活につながり、時間を上手に管理する習慣を身につけさせたい。	【成果指標】 遅刻0（ゼロ）の日が年間合計で、 毎日の「遅刻0の日」の集計結果を生徒玄関の掲示黒板に示し、全校生徒が意識して取り組んだ。	遅刻0（ゼロ）の日が年間合計で、 A 120日以上 B 110日以上 C 100日以上 D 100日未満		50日	《成 果》 8月26日現在、57日登校に対して50日が「遅刻ゼロ」であった(87.7%)。(昨年度：1学期は67日登校の83.8%) 【課 題】 遅刻や余裕のない登校をする生徒が若干名みられる。 『改善策』 2学期のスタート時に再度、時間厳守の意識やマナーの確認、より具体的・段階的な遅刻指導を行う。			C以下の場合 は取組を改善する。	毎日の出欠調査	
		「いじめ調査」を月末に実施し、いじめの未然防止、早期発見、早期解決に努める。	生徒指導課各学年	いじめ調査アンケートからでは見えない部分もあることを認識し注意を怠らない。学期はじめの面談週間や相談しやすい雰囲気づくりを心がける。また、メール等による誹謗・中傷などのいじめはなかなか発見しにくく、すべての教職員で生徒を見守る必要がある。	【努力指標】 いじめを見逃さない学校づくりに取り組んだ。 ア. よく当てはまる。 イ. やや当てはまる。 ウ. あまり当てはまらない。 エ. 当てはまらない。 A ア. イの合計が95%以上 B ア. イの合計が90%以上 C ア. イの合計が80%以上 D ア. イの合計が80%未満		C 89.2%	《成 果》 朝の登校指導や声かけ運動、SH時の教室巡回、昼食時の校内巡視、担任や部顧問との面談、いじめ調査アンケートの毎月実施など、すべての教職員で見守りや声かけを意識して取り組んでいる。 【課 題】 いじめを見逃さない学校づくりに取り組んでいると認識していない職員が複数人いる。 『改善策』 家庭との連携や、すべての教職員の協力体制を図り、生徒の些細な変化も見逃さないよう、より意識して取り組む。	C以下の場合 は取組を改善する。			教員へのアンケート
		生徒会の「元気で活力ある健全明朗な学校づくり」の目標を実現するため、PTA等の協力も得て生徒がすすんで挨拶する運動を実施する。	生徒会各学年 生徒指導課PTA	前期・後期アンケート結果で、生徒が自らすすんで挨拶をしていると回答している割合は、H30(93.6%)、R1(92.2%)のB評価である。今年度も「おはよう！声かけ運動」の伝統を継続して行う。各学年においてものSH時や学年集会で大きな声で挨拶できる指導を続ける必要がある。	【成果指標】 自分から進んで挨拶をしている生徒が増えた。			「自分からすすんで挨拶している。」と回答した生徒の割合が、 A 95%以上 B 85%以上 C 75%以上 D 75%未満				
3 部活動の強化と生徒会活動の活性化を進めるとともに、教職員の多忙化改善に取り組み「生徒と向き合う時	生徒会	多くの生徒が部に加入しているが、所属だけにとどまる生徒も見られ、生徒全員が積極的に部活動に取り組むよう指導する必要がある。 H30(89.4%)、R1(90.7%)	【成果指標】 部活動に加入後も、積極的に活動していた。	積極的に部活動を行っている生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	A 95.8%	《成 果》 昨年度の生徒アンケートで前期は95.0%、後期は90.7%の生徒が積極的に部活動を行っているという回答した。今年度は前期で95.8%の生徒が部活動に積極的に参加していると回答した。 【課 題】 部活動は全員加入の指導をしており、加入率は高いが参加意欲に関しては生徒や部活によって差が見られる傾向にある。 『改善策』 各部顧問・担任と連携し、生徒の活動状況を把握し、生徒個人に目標ややりがいを設定させ部活動に積極的に参加できるようサポートする。	C以下の場合 は取組を改善する。	生徒へのアンケート				

令和2年度学校経営計画に対する評価計画(重点目標に対する各課・学年の取組)

重点目標	具体的取組	主担当	現 状	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計	成果と課題及び改善策等	判定基準	備 考		
4	「間の確保」を図る。	②	教職員の多忙化改善に取り組む。	教頭	近年、本校職員の勤務時間外勤務時間が減少してきているが、いまだ部活動指導時間や生徒と向き合う時間の確保と両立できておらず、職員のライフワークバランスを取る必要がある。	【成果指標】 適正な退庁時間 A 4 5時間以下 B 5 0時間以下 C 5 5時間以下 D 5 5時間より多い	職員の勤務時間外勤務時間の平均が、 A 4 5時間以下 B 5 0時間以下 C 5 5時間以下 D 5 5時間より多い	A 30.4 時間	<成 果> 4,5月の臨時休業もあり、昨年度に比べて大きく減少している。 【課 題】 授業が行われた6,7月だけの平均は、50.0時間でBとなる。今後、計画的な業務の遂行及び業務のスクラップアンドビルドを行う必要がある。 『改善策』 教員の業務の平準化の工夫を更に進めるとともに、業務改善の意識を持つよう指導する。	C以下の場合 は取組を改善する。	時間外勤務時間調査
		③	悩みを持つ生徒に対し、全教職員が生徒に寄り添い、共感的に話を聞く時間を確保する。	保健厚生教育相談	約86%の生徒が「先生方は親身になって相談に乗ってくれている」としている。しかし、約14%の生徒が不信感を抱いている。面談週間はもちろんだが、5分前5分後行動などを通して生徒をよく観察し、職員全体が親身に暖かく生徒に対応していという姿勢を示す必要がある	【満足度指標】 教職員が生徒に対し、共感的に親身になって相談になることができた。	「先生方は親身になって相談に乗ってくれた。」と感じている生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	B 89.6%	<成 果> アンケートに回答した173名のうち155名で89.6%と大部分の生徒が親身になって相談に乗ってくれると答えた。 【課 題】 あまり当てはまらないと答えた生徒の割合が9.8%と減ってはいるが、全く当てはまらないと答えた生徒も1名(0.6%)と、全員が満足しているわけではない。 『改善策』 担任や顧問だけでなく、全教職員で生徒に対応することで、生徒の心の安全基地を学校の中に見つけることができるようにする。	C以下の場合 は取組を改善する	生徒へのアンケート
	地域における6次産業の担い手として、「地域産業の振興に貢献できる人材の育成」を図る。	①	各種イベントやボランティア活動をとおり、地域との交流を図るとともに、地域社会に貢献する。	地域産業科 地域創造科	能登町内外には各種イベントやボランティア活動があるが、生徒によっては参加しない傾向がある。全員の生徒が諸活動に参加し地域交流を一層深める必要がある。	【成果指標】 多くの活動がある中で2回以上参加することができた。	能登町内外の活動に2回以上参加したと答えた生徒の割合が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	25.0%	<成 果> 2回以上参加した生徒は1年生25名中10名、2年生27名中5名、3年生28名中5名の合計20名であった。主な活動内容は除草、溝掃除、能登少年自然の家でのボランティア活動である。 【課 題】 例年計画されている行事が新型コロナウイルス感染の関係で実施されていない。 『改善策』 今後開催される行事を把握し、参加可能な内容であれば対象生徒に事前に案内し、地域交流を深めていく。	C以下の場合 は取組を改善する。	生徒へのアンケート (令和2年8月20日実施) 回答者数は80名
	②	保護者や地域の方に能登高校の理解を深めてもらい、行事に参加してもらおうことで本校の人材育成に協力してもらおう。	総務課	「能登高だより」の配布や能登町広報誌「のと広報」に掲載することによって学校理解に効果があると考えられる。今年度も来校者を一層増やす工夫が求められている。様々なイベントとをからめ、PTAの参加人数を増加させていきたい。	【成果指標】 来校する保護者・地域住民が増えた。	来校された保護者・地域の方(学級懇談会・能登高祭・能登高商店開店時・教育ウィーク・PTA行事等)の人数の合計が、 A 1400人以上 B 1200人以上 C 1000人以上 D 1000人未満	630人	<成 果> 今年度は休校期間が長く、入学式、PTA理事会、おはよう声かけ運動等に参加した保護者のみの人数となった。 【課 題】 新型コロナウイルス感染予防の観点から沢山の方に来校していただくのは難しい状況である。 『改善策』 新型コロナウイルス感染予防対策を万全に行い、出来る範囲で来校者を募る。	C以下の場合 は取組を改善する。	行事毎の人数調査	

※評価の記号がない項目は、年度途中では評価できない項目である。